

現 在アメリカ合衆国では、五大湖周辺の中央西部を中心に、五百万近くのノルウェー系アメリカ人が生活を送っている。アメリカの中では母国と気候が比較的近いせいだろうか、とりわけミネソタ州、ウイスコンシン州、アイオワ州などに多い。もちろん公用語は英語だが、祖国ノルウェーと緊密に連絡を取る機関も多く、ノルウェー系ルター派教会も根を下ろしている。現地のウイスconsin大学やミネソタ大学はスカンディナヴィア研究の拠点として著名である。

十九世紀半ばから二十世紀初頭にかけて、スタヴァンゲルの港から出航する船が相次いだ。目的地はチャンスの国アメリカへの玄関ニューヨーク港である。イペセンやムンクの活躍した当時のノルウェーは、おそらくヨーロッパで最も貧しい国の一つであり、増え続ける人口に対して食料の安定供給もままならなかつた。北海油田で潤い、失業率も限りなくゼロに近い現在の姿からは想像もできない。この間、およそ人口の三分の一にあたる八十万人が故郷を離れた。ノルウェー系移民は、アメリカへのヨーロッパ系移民の中で、アイルランドに次ぎ多い。千年前のノルウェー人も、やはり北大西洋の島嶼に土地を求めて続々と出帆し、定住する先々をノルウェー人の社会とした。当時のアメリカへの移住は、ヴァイキング時代のそれに匹敵する第二次大量移住

であった。

続いている。

一九〇七年、ラーソンはイリノイ大学にボストを得た。彼の研究テーマは多岐に渡るが、中核を占めたのは、中世におけるイングランドとノルウェーの関係史であった。一九一二年、ラーソンはパトナム社の「民族のヒーロー」という人気を博したシリーズで、クヌート王の伝記を執筆した。ノルウェー人物史¹〔345頁〕で少し触れたが、十一世紀のクヌート王は、イングランド、デンマーク、ノルウェーの三つの王位を兼ねた、最も

著名なヴァイキングである。ラーソンのこの伝記は、クヌートの治世に焦点を合わせた事実上はじめての専門的研究であり、クヌート研究——現在も十分に達成されているとはいえない——の出発点である。さらに彼は、生誕地ノルウェーの中世史料の紹介にも精力を注いだ。一九一七年には、国王のあるべき姿を論じる『王の鏡』を、一九三五年には、ノルウェー中世法の白眉である『グラシング法』と『フロスターング法』を、古ノルウェー語から英語に翻訳した。英語圏の中世ノルウェー研究の基礎を築き、中世ノルウェー史の諸事実を広く認知させたのは、まことにラーソンである。

一九三七年、ラーソンは『変化する西洋』という論集を出版した。アメリカにおけるノルウェー人の学問的貢献に光を当てる論考が過半を占める。移民という

ノルウェー
人物史

4

ある移民の生涯

ローレンス・M・ラーソン 1868~1938

(文)小澤実

19世紀半ばから20世紀初め、多くのノルウェー人がアメリカを目指した。新天地で苦學を重ねたすえ、歴史家の頂点に立った男の物語。

ハンディを背負いながら知の世界を開拓した、ラーソン自身の先人たちである。彼はこの年、アメリカ最大の歴史家団体である「アメリカ歴史学会」の副会長に選出された。彼の研究が、すでにアメリカの知的社会の中で確固たる評価を得ていたことの証左である。一九三八年、ラーソンは同学会の会長となり、アメリカ人歴史家の頂点に立つた。移民としては初めての快挙である。

この年、彼は在任わずか半年で急逝した。もちろん、惜しむべき死である。しかししながら、この年に世を去つたことは、ひょっとすると彼にとって幸運であったのかもしれない。翌三九年、共産主義国ソ連と不可侵条約を結んだナチス・ドイツのボーランド侵攻がはじまり、四〇年には母国ノルウェーがドイツの占領下に入った。ノルウェー王家はイギリスに亡命し、ファシズムの共鳴者クヴィイスリンクが傀儡政権を樹立した。ラーソンは生前にまとめた半生記『若き移民の航海日誌』のなかで、市民権を得たアメリカといふ国家に忠誠をちかいつつも、ルーツのあるノルウェーに対して湧き上がる想いを書き綴っている。自由主義の体現国アメリカが最も嫌う共産主義とファシズムが故国を蹂躪したと知つたならば、何を思つただろうか。

ラーソン以降、アメリカでノルウェー中世史を専攻する研究者はほとんどない。

しかしながら、ノルウェー・ヴァイキングの子孫であるフランス・ノルマンディ住民（ノルマン人）の活動に注目し、その歴史的意義を明らかにした人物はいた。ラーソンが博士号を取得した一九〇二年、アーヴィングが博士号を取得したハーバード大学にポストを得、ノルマン人という新しい研究テーマへと移つた。そして立

て続けに『ヨーロッパ史の中のノルマン人』（一九一五年）と『ノルマンの制度』（一九一八年）を刊行した。いずれも中世ノルマンディ研究の古典である。

中世の教育システムを専門としていたハスキニズが、なぜノルマン人に関心を移したのだろうか。彼の父方はイギリス系、母方はスコットランドもしくはアイルランド系の家系である。彼の自伝は残つてはいないけれども、ノルウェー移民のゆきかう町で、年長のノルウェー系アングロ・ノルマン王国やノルマン・シリヤ王国の研究を続けている。

